

『アキラの恋人』から見た『キューバの恋人』

— 「キューバ映画上映会」の報告を兼ねて—

寺島 佐知子

キューバと日本の唯一の合作映画として知られる『キューバの恋人』（黒木和雄監督／1969年）が、実は「キューバでは公開されたことがなかった」と言われても、たいていの日本人は俄かには信じがたいだろう。また、その事実を受け入れた後も、驚きと共に「なぜ上映されなかったのか？」という疑問が長く尾を引くことだろう。一方キューバでは、初めてこの合作映画の存在を知ったとき、同じように驚きのあまり「あり得ない！」と断じた人物がいた。私のキューバ映画研究の師、マリオ・ピエドラ教授（ハバナ大学）¹⁾である。後に「キューバの（知られざる）恋人」²⁾という調査レポートを執筆し、ドキュメンタリー『アキラの恋人』の製作顧問となる人物だ。

事の発端は2006年4月12日、黒木和雄監督が亡くなったときに遡る。翌朝の新聞で訃報を知った私は、特に深い考えもなく、ピエドラ教授にメールを送った。「黒木和雄という監督が亡くなりました。彼はキューバで映画を撮ったことがあります。」すると、まもなく届いた返信には、「その映画の話は初耳だ。キューバでは全く知られていない」とあった。メールから伝わる師の驚きと興奮ぶりに今度は私が驚いた。

当時ピエドラ教授はキューバ映画芸術産業庁（ICAIC）¹⁾のウェブ情報誌（月2回発行）*icaic digital*の編集をしており、黒木監督の訃報は「4月17日号」に掲載された。その概要を紹介しよう。

去る4月12日、東京で黒木和雄監督が亡くなった。享年75歳。同監督は多作ではなかったが、貴重なフィルモグラフィを残した。これまでのところ、キューバで長編フィクションを撮った最初にして唯一の日本人監督である。同合作映画のタイトルは『キューバの恋人』（1968年製作）。だが、黒木がキューバで知られるきっかけは、『とべない沈黙』（1966年）の公開だった。これが縁でICAICに招待され、各関係機関の協力を得て、同合作を撮る運びとなる。プロデューサーは、オルランド・デ・ラ・ウエルタで、津川雅彦と共にオブドウリア・ブラセンシアが主役を演じた。（中略）『キューバの恋人』は、我が国では一度も上映されたことがない。

教授とはこのあと2、3回、件の合作映画をめぐるメールを交わし、日本びいきの師が当時の関係者から話を聞こうと動き始めたことを知ったが、続報のないまま、いつしか4年の歳月が流れた。

『アキラの恋人』プロジェクト

2010年。ピエドラ教授のメールで師が調査活動が続いていたことを知る。そして、『キューバの恋人』でヒロイン、つまり津川雅彦の相手役の「マルシア」を演じた“女優”の所在が分からないこと、それを調べるのに、キューバ国営テレビのディレクターを務めたこともある、自分の教え子、マリアン・ガルシアに協力を依頼したこと、すると彼女から調査の経緯そのものをドキュメンタリーにする提案があったことなど、事態の急展開ぶりを伝える報告が届いた。ちなみに私はマリアンと面識はあったが、ハバナで会えば挨拶を交わす程度の間柄で、まさか共同作業をするようになるとは、この時点では想像もしていなかった。

夏。研究のためハバナを訪れる越川芳明教授（明治大学）に『キューバの恋人』のDVDを託し、ピエドラ教授に渡してもらった。

10月。ピエドラ教授から突然、「津川雅彦氏にインタビューしたい」と、氏の所属するプロダクションのメールアドレスが送られてきた。「コンタクトをとって欲しい」というのだ。芸能界に何のツテもない私に頼まれても…。内心困惑したが、ダメで元々。プロダクションの住所を調べ、事情説明の文書を郵送した。すると幸いなことに、すぐに快諾が得られた。こうして40年以上前に主人公「アキラ」を演じた津川雅彦氏とのインタビューが電子メールを介して実現した。

時をおかず、マリアンが企画するドキュメンタリーの製作資金を捻出するため国際交流基金に助成を申請することになった。ピエドラ教授から送られてきた企画書を翻訳し、再び越川教授の協力を得て、企画に賛同して下さる方々の署名を集めた。ドキュメンタリーのタイトルが『アキラの恋人』となっていたので、企画を「アキラの恋人プロジェクト」と呼ぶことにした。

11月。マリアンはハバナの日本大使館を通し、申請書類一式を国際交流基金に提出した。結果が出るのは翌年の春。吉報を得たらすぐに撮影を始められるよう準備が始まった。基本的に私としては「頼まれたことだけをする」つもりだったが、そのときのために黒木監督に関連する本を買い、参考になりそうな情報を伝えていった。

12月。観客として何度か参加している、恒例の国際新ラテンアメリカ映画祭に行くためと「アキラの恋人プロジェクト」の手伝いを兼ねてハバナを訪れた。マリアンのこじんまりした住まいで師も交え三人そろってDVDで『キューバの恋人』を見ながら、私は副音声で聴ける監督本人のコメントをひとつひとつ通訳した。マリアンはせっせとメモを取り、ピエドラ教授は当時を思い出しては興味深いコメントを發した。

明けて2011年。まもなく申請結果が判明すると心待ちにしていた頃、あの東日本大震災が起きた。そのせいだろうか、4月が過ぎても連絡がなかった。たまりかねたマリアンから「電話で問い合わせたい」と頼まれ、国際交流基金に電話した。問い合わせ2度目にして「申請が通った」と告げられ、即刻メールで報告、インターネットを介して喜びを分かち合った。待ちに待った「ゴーサイン」が出た！

5月15日、タイムリーなことに、『キューバの恋人』が同国で初めてテレビ放映された。番組のタイトルは*De cierta manera*。毎週12チャンネルで放映している、古いキューバ映画を紹介する番組だ。しかもどういう経緯で知ったのか、番組の企画・進行を務める映画研究家ルシアノ・

カステイリョは、「現在、同作について調査中」として、ピエドラ教授とマリアンに言及したらしい。すると、番組を見ていたグロリア・リーが日本大使館を通して、関係者として名乗り出た。彼女は、主人公アキラがサトウキビ刈りで知り合う娘、「グロリア」の役を演じた。にもかかわらず、43年後のその晩初めて、自分が出演した映画を見たのだった。テレビ放映は新たな関係者の発掘に繋がった。

それから約1ヶ月後。また嬉しいハプニングがあった。ICAICに保存されていた、日本側の印刷物などが思いがけず見つかったのだ。この新発見に興奮気味のマリアンの報告に続き、スキャンされた資料がメールで届いた。黄ばんだ紙、小さな活字、大学紛争の写真など、撮影当時の世相を彷彿とさせる某大学新聞や、映画チラシに目を通し、『キューバの恋人』に関係する内容を翻訳して伝えた。ドキュメンタリー『アキラの恋人』の中で黒木監督の発言として紹介されている言葉の多くが、このとき見つかった資料に拠っている。幸運な発掘だった。

一方、冷や汗をかいたこともある。監督から「津川雅彦のコメントを紹介するシーン」が、文章入りイラストで送られてきたときのこと。私が「ワード」で横書きした日本語をマリアンが縦書きに変換した際に生じた、思いがけない誤表記に絶句した。「キューバ」の「ー」（長音譜）が「横書き」のままだったり、句読点の位置や向きが「逆」になっていたのだ。慌てて全文を「縦書き仕様」のドキュメントに直し、改行も工夫して送り返したが、「もし事前に見ていなかったら…」と思うと今でもぞっとする。

ところでマリアンやピエドラ教授にとり、ドキュメンタリーを製作するなかで最も大変だったのが、アキラの相手役のマルシアを演じたオブドゥリア・プラセンシアを探し出すことだった。ピエドラ教授によれば、「苗字を頼りに50人以上に電話をした」そうだ。それでも探し当てられず、最終的に警察に協力してもらったという。だが、ようやく見つけ出したのに、当初オブドゥリアは取材を拒否。それでもマリアンの粘り強い働きかけが功を奏し、出演を承諾してくれたそうだ。ちなみにピエドラ教授がマリアンに協力を依頼した理由は、彼女のこうした才能を見込んでのことである。

ドキュメンタリーの完成は8月中の予定だった。9月中旬から10月にかけて、東京・横浜・京都で開催される「ラテンビート映画祭」で、上映が決まっていた『キューバの恋人』との併映を目論んでいたからだ。だが、間に合わなかった。

完成したのは10月下旬。プレミア上映は、ハバナで開催された「日本文化週間」のイベントの一環として11月12日に行われた。日本大使夫妻が出席したほか、オブドゥリア・プラセンシアを始め出演者も駆けつけた。続いて12月初旬。恒例の国際新ラテンアメリカ映画祭でも上映された。

その頃私は日本で友人の字幕翻訳家に頼み、『アキラの恋人』の字幕作成作業を進めていた。「ラテンビート映画祭」での上映が叶わなかったので、自腹を切って日本語字幕を付けることにしたのだ。英語字幕だけでは、日本では見てもらえないからである。年末、日本語字幕付きデジタル・ベータカムとDVDが完成した。

2012年。「日本でもこのドキュメンタリーの存在を知ってもらいたい。」かつて受講生として

在籍した立教大学ラテンアメリカ研究所に相談すると、『キューバの恋人』と『アキラの恋人』を2週に渡って1作ずつ上映しトークも交える機会を得られた。キューバを始めラテンアメリカに精通するジャーナリスト、伊高浩昭氏の協力も仰ぐことができた。

5月26日（土）、『キューバの恋人』上映およびトークの日。大教室がほぼ満席となった。上映に先立ち、私は紹介者として短く以下の3点に触れた。

① 製作の背景

合作のきっかけは、黒木監督の長編フィクション第1作『とべない沈黙』（1966年）がICAICで好評を得たこと。それを知った竹中労氏と山本満喜子氏の積極的な働きかけで³⁾、革命10周年の記念作品を黒木監督が撮ることになった。キューバでの撮影期間は3ヶ月半。記録によると、現地での撮影の終了は1968年10月21日。映画のテーマは「愛と革命」である。

② 1968年（撮影時）のキューバ

前年10月にボリビアでチェ・ゲバラが亡くなる。ゲバラの死は、作品のモチーフのひとつである。

③ 注目シーン

- i) 次回上映する『アキラの恋人』に関係するシーンとして、バスの中で「サンティアゴに行こう」の歌が歌われるシーン。
- ii) 日本映画の存在を示す例として『丹下左膳』のポスターや、カーニバルでキューバ人が『座頭市』のパフォーマンスをするシーン。
- iii) ドキュメンタリー性

津川雅彦以外はすべて素人が演じている。そして屋外のシーンの多くが、“ゲリラ”的かつフリー・シネマ流⁴⁾に撮影されており、フィクションとはいえドキュメンタリー性に富む。

では、ここで『キューバの恋人』のストーリーを紹介しておこう。

“英雄的ゲリラの年”のスローガンが掲げられた1968年。休暇を利用してハバナに上陸した船員アキラは、街で見かけた娘マルシアに一目惚れする。彼女は葉巻工場で働く一方で、革命を守る民兵だった。チェ・ゲバラを信奉する彼女は、自らゲリラ兵士となって革命を世界に広めるべく祖国を後にする決意を固めていた。旅立つ前に故郷を訪れるマルシア。彼女を追って全島を縦断しながら、アキラは「革命下のキューバ」の多様な実相に触れる。

上映後、伊高氏が自作の年表をもとに、スピーディにキューバ革命の概要を紹介。質疑応答の時間もたっぷりあり、充実したトークになった。「映画を見るという経験に収まらない、まさに学習の場でした」という感想がツイッターで流れ、手ごたえを感じた。

だが、気を抜く間はなかった。次の発表は2週間後。トークでは私も話さなければならない。伊高氏からは「年表を作成し配布するよう」事前にアドバイスがあったので、ひたすら資料に目を通し年表を編んでいった。年表の軸は「ICAICの歩み」と、マルシアが象徴する「国際的武装（ゲリラ）闘争」。前者は私とキューバとの関わり原点だが、後者は、実を言うとキュー

バ革命のなかで共感できない点だった。その理由は単純で、武力に訴えることに対する違和感や反感、戦争に拡大することへの懸念があったからだ。

しかし、資料として『カストロの道—ゲリラから権力へ』（K.S.カロール著）を読み進めていくうちに、「なぜキューバが国際的武装闘争に希望を託したか」、理解できるようになったことは、思わぬ収穫だった。ICAICに対する理解にも繋がったからだ。しかも『キューバの恋人』がキューバで上映されなかった理由にも関連しているようだった。これについては、本稿の後半で触れる。

『アキラの恋人』：キューバ側から見た『キューバの恋人』

6月9日（土）、ドキュメンタリー『アキラの恋人』の上映とトーク（対談）。

1日付け朝日新聞（夕刊）に「革命後の高揚撮った合作映画 キューバ未公開の謎に迫る」（p.44参照）という見出しで『アキラの恋人』が紹介された効果か、大教室は満員。入り切れなかった来場者のために別教室でも上映した。

前回同様、上映前に私から『アキラの恋人』を簡単に紹介する。見どころとして、『キューバの恋人』の製作秘話に迫るだけでなく、ICAIC創成期の紹介との「二部構成」になっていることを強調した。なぜなら、冒頭のICAICの生き証人らの発言や写真は、それ自身が貴重な映像資料であり、文字による記録に信憑性と永遠の息吹きを与えるからだ。そこには、革命の理想を信じ、映画を通してその実現に助力しようとしたICAICが、革命政府と“二人三脚”で歩み始めた頃の束の間の“ユートピア”が垣間見える。

さて、前置きはこのくらいにして、『アキラの恋人』を通して『キューバの恋人』を見ることにしよう。キューバ側から観た注目すべき点を以下に挙げる。

1) ICAIC創成期と日本映画の関わり

ICAICは映画に関わる全般を管轄する独立機関で、革命政権発足後3ヶ月を経ずして創設された。映画を自国の産業として育成していく一方で、観客の育成にも取り組む。後者については、それまでの米国系配給会社による商業目的の上映プログラムを刷新、映画を芸術として理解し鑑賞すること、国民の見聞を広めることを主眼に置いた。基本方針は「多様化」、具体的には、上映作品の製作国やジャンル、ムーブメント等の多様化を実現すること。その路線上に新しい輸入市場として日本が浮上した。1967年、当時のICAIC幹部、ラウル・タラドリと、同じくICAIC幹部で映画監督のフリオ・ガルシア＝エスピノサが訪日、約1ヶ月滞在する。“サムライ映画”のあれこれや『座頭市』シリーズ数本を買ったほか、主流から離れて製作していた“ニュー・ジャパニーズ・シネマ”にも注目。『とべない沈黙』（黒木和雄監督／1966年）を見て気に入る、買い付けた。ちなみに黒木監督は生前、同作品がキューバに送られたのは「偶然」と語っていたが、ピエドラ教授は「吟味のうへの購入」と言っている。それは、「買い付け伝票を見れば明らか」だそう。おそらく謙遜して言ったのだろうが、監督の名誉のためにも、この際「偶然ではなかった」ことを強調しておきたい。

ところで、映画の買い付けのほか、タラドリらは合作映画製作の可能性も探っていたらしい。幸か不幸か、大手映画会社からは色よい返事がもらえなかったのだが、黒木監督との合作の可

能性は有望だった。『アキラの恋人』のなかでタラドリは次のように言っている。「日本に滞在中、幾人かと面識を得たいと思いました。黒木監督とコンタクトがとれました。」実は、この発言も生前の黒木監督の証言とは食い違っている。なぜなら、黒木監督は常々「ICAIC側から合作のオファーをもらったのは“青天の霹靂”だった。『とべない沈黙』を観たICAICが同作を気に入り、監督に指名されたと知るが、それを積極的に後押ししていたのが、山本満喜子と竹中労の両氏だった」と語っていたからだ⁵⁾。あれから40年以上が経過し、タラドリの記憶も確かではないうえ、日本側の当事者3名が鬼籍に入ってしまった今、詳細は確かめようもないが、拙稿では「キューバ側の証言」に沿って話を進めることにする。先のタラドリ発言に戻ると、「黒木監督はどちらかといえば前衛派で、商業映画の監督ではありませんでした。そして、彼をキューバに招待し、そこで合作の段取りをしました」と続く。ICAICが黒木監督を気に入った理由のひとつは、『とべない沈黙』が商業映画と一線を画していた点だろう。そのうえ、ICAICの映画人が模索していた「新しい映画」の好例となり得ていたからだ(ピエドラ教授の意見)。『アキラの恋人』のなかで、トマス・ピアード監督は黒木監督のことを「神のような存在だった」と言い、当時の傾倒ぶりを披露している。かくしてICAICは、革命10周年を記念する合作映画の監督として黒木を招待した。

2) 合作：「コラボレーション」と「コ・プロダクション」の違い

キューバ側の見解によると、「合作」には二つの型がある。ひとつは、外国人監督に対しICAICが必要なサービス(人材、移動手手段、撮影機材、宿泊施設と食事など)を無償で提供することによって製作を援助する「コラボレーション(協力)」。もうひとつは、ICAICと相手国とが共同で制作する「コ・プロダクション(共同制作)」である。

後者の代表的な例が、ソ連との合作 *Soy Cuba* (邦題：怒りのキューバ) だ。ソ連のモス・フィルムとICAICの共同制作には、ソ連側から監督にミハイル・カラトーフ、脚本原案がエフゲニー・エフトゥシェンコ、撮影はセルゲイ・ウルセフスキーという錚々たる面々が参加し、キューバ側からは、脚本の共同執筆者としてエンリケ・ピネーダ＝バルネ、美術・衣装担当に画家のレネ・ポルトカレロ、音楽がカルロス・ファリーニャス、そしてキャストのほぼ全員が参加した。両国合わせて総勢200余名の大所帯だった。1961年10月にソ連側スタッフのキューバ訪問でスタートした同企画が、4編のエピソードから成る141分の大作として完成したのは1964年のことだった。この間、ソ連側は豊富な資金と資材を投入し、完成後は撮影に使用したトラックを始め撮影機材をキューバ側に寄贈した。それらの機材は今も使われており、キューバにとっては合作がもたらすメリットとなった。(その反面、低予算を余儀なくされるキューバ映画産業にとって製作方法の参考例とはならなかった。)

これに対し、『キューバの恋人』は「合作」といっても「コラボレーション」に属す。

3) 「コラボレーション」(協力型合作)としての『キューバの恋人』：製作秘話

黒木監督の第1回キューバ渡航は1968年5月。ロケハンを兼ね、ICAICと具体的な話し合いをしたようだ。約1ヶ月の滞在だった。ちなみにこの滞在中、監督はキューバ映画の傑作『低開

発の記憶』（トマス・グティエレス＝アレア監督／1968年／97分）をICAIC試写室で見ており、『キューバの恋人』への影響を認めている⁶⁾。2回目の渡航は7月。監督を含めわずか7人という最少チームで撮影に臨む。キューバ側からはプロデューサーのオルランド・デ・ラ・ウエルタ、日系二世の通訳、フランシスコ・ミヤサカ、それに移動用の車2台の運転手2人が参加。加えてICAICは、宿泊、食事、人員の移動や機材搬送の便宜等も無償で提供した。

日本で構想したシナリオは、キューバの現実にそぐわない部分もあり、現地で見直しを迫られた。ICAICから脚本家アルフレド・クエトが派遣され、アドバイザーを務めた。ただし、最終的な判断は、あくまでも監督に委ねられた。黒木は「特筆すべきは、ICAICがあらゆる段階にわたり無検閲で通したことだ。社会主義キューバの文化政策のプラス面を垣間見たようで感動的であった」と記している⁷⁾。

また、劇中で歌われる*Iré a Santiago*（サンティアゴに行こう）は、ロベルト・バレラが作曲した。今やキューバ合唱界の代表的レパートリーとなった同曲は、実は『キューバの恋人』のために作られたのだった。これは今回の調査で判明した“新事実”だった。作曲者本人は「その後映画がどうなったか全く知らなかったため、コーラス用にアレンジし直し、オルフェオン・サンティアゴ合唱団とエレクト・シルバ音楽監督に捧げた」と告白している。歌詞は『とべない沈黙』のタイトル同様、スペインの詩人フェデリーコ・ガルシア＝ロルカの詩に由来している。バス車中のシーンでこの歌を歌っているディグナ・ゲーラは、現在「キューバ国立合唱団」の音楽監督として世界各地でこの歌を披露しているのだが、当の本人でさえ43年前の撮影時にソロで歌ったことを全く覚えていなかった⁸⁾。

俳優として日本から参加したのは津川雅彦ひとり。黒木監督の熱意に押され出演を承諾した。ノンポリで人懐っこい船員アキラは、一目惚れしたマルシアを熱心にスペイン語で口説きながら、西のハバナと東のサンティアゴを往復する。

一方、マルシアを演じたのはオブドゥリア・プラセンシア。日本ではジュリー・プラセンシアと紹介された。名前の他にも“新事実”が浮上した。彼女はオーディションで選ばれたのではなく、ミス・ハバナに選ばれた仲間たちと活動中のところを黒木監督に見出されたのだ。まだ16歳の、まさしく葉巻工場で働く娘は映画出演に難色を示した。しかし最終的に皆から説得され、「革命への貢献になる」と思い、映画出演を引き受ける。他のスタッフ同様、出演料に相当する報酬はなかったが、翌年に通訳のミヤサカと共にプロモーションのため日本に招かれた。

製作秘話を通して印象的だったのは、1968年のキューバはすでに物資の不足等により厳しい撮影環境だったものの、日本人チームは状況に適応し、降りかかる問題をてきぱきと処理していったこと、それに対しキューバ側も全面的な助力を惜しまなかったことだ。

4) ドキュメンタリー的価値

『アキラの恋人』に登場する証言者たちは皆、『キューバの恋人』のドキュメンタリー的価値に注目する。フリー・シネマ風に撮影された屋外のシーンに出てくる人たちは、ほとんどがたまたまその場に居合わせた市井の人々である。また、カメラは当時の世相をふんだんに捉えている。街中に飾られたチェの写真。商店の前の行列。ボランティア労働の草刈りやサトウキビ

刈り。同奉仕活動のための一時的閉店。ベトナムとの連帯。民兵の活動や訓練。フィデルの力強い演説とそれを聴く群衆。人懐こくて陽気で活気あふれる人々。カーニバルの熱狂。日本映画のポスターや「座頭市」を真似たパフォーマンス。そして「チェコ侵攻事件」への風刺画。

ピエドラ教授は、2012年11月、来日した折の上映会で、「当時の世相をこれほど見事に伝えるドキュメンタリーはキューバにも稀だ。キューバ人は黒木監督に感謝しなければならない」とさえ言った。

以上、キューバ側から見た『キューバの恋人』の特徴や見どころ、日本側に流布している情報との相違点等を紹介した。

トーク：国際武装闘争とグラン・サフラ

ここからは、当日の伊高氏と私のトークに話を移す。話題の焦点として、私は2つのテーマを選んだ。ひとつは、『キューバの恋人』で、マルシアが“アキラとの愛”を捨てて選んだ「国際ゲリラ活動（武装闘争）」。繰り返すが、チェ・ゲバラはその象徴的人物であり、同作は彼の死がモチーフのひとつになっている。ふたつ目は、同作中に何度か見て取れる「グラン・サフラ」（サトウキビ収穫1000万トン为目标に掲げる1970年の計画）。私にとり、両テーマとも今回の対談に向けて急いで独学したことだったので、伊高氏とのトークの場を借りて知識を再確認したいと思った。さらに、キューバ史における両事象の意味を参加者と共に追究しようという意図があった。トークの時間を受け身でなく、能動的に共有して欲しかったからだ。

結果的にトークは“ウサギとカメ”の掛け合いとなった。“一を訊くカメ”の私に“十を答える伊高ウサギ”。何度も年表を行きつ戻りつしながらの進行となったが、ここでは順を追って、両事象の推移を見ていくことにしよう。なお、映画関係の事項はゴチック体で表記した。

フィデル・カストロが「アンデスをシエラ・マエストラに」と唱え、初めて「ラテンアメリカ武力解放闘争」の意思を表明したのは1960年6月のことだった。なぜ、そのような選択が必要だったのか？ 前述のカロルの著書によれば、もともとキューバはソ連型社会主義とは別個の、独自の国家モデルを標榜していたのだが、キューバ一国でそれを達成するのは不可能であり、ラテンアメリカ全体が力を合わせる必要がある、と考えたからだった。9月、「ハバナ宣言」を通してフィデルは、北米のラテンアメリカに対する干渉を非難する。

1961年1月、米国はキューバに対し国交断絶を宣言し、4月にはCIAが関与した傭兵部隊が「ブラヤ・ヒロン侵攻事件」を起こす。しかし、3日を経ずしてキューバが勝利。5月、フィデルは社会主義宣言をする。Soy Cubaの準備にソ連側スタッフがキューバを訪問するのは10月。1962年2月、「第二次ハバナ宣言」で「あらゆる革命家の義務は革命を行うことである」として、ラテンアメリカ諸国に武装革命を呼びかける。10月、ミサイル危機が起き、結局、米ソはキューバの頭越しに妥協、事件は収束する。米国との平和共存を望むソ連に対し、キューバは不信任感を抱いた。

しかし、1963年4月下旬から6月にかけて、フィデルはソ連の招待を受け、同国に長期滞在し、ソ連と和解する。帰国後、革命の目標だった「工業化計画」を放棄、砂糖生産を優先する選択をする。「それでは、モノカルチャーからの脱却という当初の目標はどうなったのか？」私のこ

の問いに対し、伊高氏は「砂糖の輸出と工業製品との物々交換という、コメコン（経済相互援助会議）の分業体制を選択したのだ」と回答した。ちなみに、このときゲバラは工業化の誤りを反省し、自己批判している。

1964年1月、フィデルは演説で次のように言った。「今や全員が働かねばならない」「ソ連製サトウキビ刈り取り機が近々到着し、1970年、砂糖生産が1000万トンになる。」

1965年は「農業の年」とスローガンを打ち、1970年の生産目標を1000万トンと定め、砂糖産業重視政策に転換することを明らかにした。「砂糖生産を増やし、余剰分は資本主義国に売って外貨を得ようと考えた」と、伊高氏は分析する。こうして経済面ではコメコン体制と歩調をそろえつつ、革命の輸出を推進する方針は堅持されていた。だが、「対米平和共存をのぞむソ連にとって、それは賛成できかねる方針だった」（伊高）。2月、アルジェでチェ・ゲバラはソ連を非難する演説をし、帰国後に工業相を辞任、公の場から姿を消すが、4月にコンゴでゲリラ戦を開始する。そのころベトナムでは米国による北爆が本格化していた。キューバは「ミサイル危機」の苦い経験から、もしキューバがベトナムの立場になった場合、ソ連の軍事支援が得られるか懐疑的だった。10月、現キューバ共産党が発足する。フィデルはチェの「別れの手紙」を公表する一方、ラ米武装闘争の支援を継続する。

1966年、7月26日の革命記念日の集会でフィデルはラテンアメリカの正統派共産党を非難、武力解放路線の擁護を表明。11月、ゲバラはボリビアに到着し、ゲリラ戦争の準備を開始する。

1967年3月の演説で、フィデルはベネズエラ共産党を弾劾。「キューバにとって大切なのは《共産主義者》を自認することではなく《革命家》である」ことを再確認する。これは、ラテンアメリカにおける親ソ派修正主義的政治の拒否を示していた。6月、ソ連のコスイギン首相、フィデルとの会談で、ラテンアメリカ諸国共産党の合法的な活動を無視してゲリラ闘争を行うことについて批判する。7月、ソ連のブレジネフ書記長がフィデルに世界革命を止めるよう通告したとの説あり。10月、ゲバラが逮捕され、暗殺される。

1968年1月、ハバナで開催された国際文化会議でフィデルは「第三の共産主義（新左翼）」の到来を告げる。そして「エスカランテ事件」により、親ソの傾向を排除する。3月、「革命大攻勢」の開始を宣言し、「ゲバラ精神」を鼓舞する。8月、ソ連軍による「チェコスロバキア侵攻事件」が起きる。このときフィデルは、ソ連軍の侵攻を支持する演説をする。なお、黒木監督が撮影のためキューバに滞在したのは7月から10月21日迄である。10月、サトウキビ刈り入れのための大衆動員が開始される。

1969年1月、革命10周年記念集会の演説で、フィデルはソ連を礼賛し、国民的目標として「グラン・サフラ」をアピールするも、ゲバラやラ米のゲリラについて一言も触れなかった⁹⁾。

そして1970年、砂糖収穫高は目標の1000万トンに達せず、フィデルは「グラン・サフラ」の失敗を認めた。なお、伊高氏の補足解説によると、「キューバは1972年7月、コメコンに正式加盟し、ソ連・東欧の社会主義諸国経済圏に組み込まれる」のである。



推論：上映されなかった理由

さて、こうした歴史的展開を踏まえたうえで、いよいよ「なぜ『キューバの恋人』はキューバで公開されなかったのか？」という謎に迫ってみよう。真相は藪の中だが、ピエドラ教授は、考え得る要因を三つ挙げ、そのうえで「複数説」を唱える。まず一つ目の要因は、ゲバラの死によって国際ゲリラ活動の計画が大打撃を受け、1969年の時点では優先課題ではなくなっていたこと。二つ目は、素人俳優の起用により「マルシア」の真実味を表現しきれなかったこと。さらに、「マルシア」のような娘が「国際ゲリラ兵」として国外に送られることは、当時のキューバでは非現実的に映った。三つ目は、日本の左翼陣営に『キューバの恋人』の評判が良くなかったこと。実際、黒木監督は、読売ホールの招待試写会（1969年2月か3月に開催）での上映後、全共闘の女子学生に取り囲まれ、「売国奴」「国辱映画」「反革命」と罵られたうえ、顔に唾まで吐きかけられ、「左翼から非常に不評でした」と証言している¹⁰⁾。

以上の三要素を総合して、ピエドラ教授は問いかける。「映画のテーマがキューバ側の関心から外れており、完成度に満足がいかず、しかも日本の左翼に歓迎されなかったのなら、キューバで公開する決定をICAICが下すだろうか？」あるいは次のように想像する。「もし仮に上映した場合、キューバの友人である日本の左翼から挑発行為と受け取られたかもしれない。」

トークでは、『キューバの恋人』のなかに挿入されている「ソ連軍によるチェコ侵入事件」の風刺画が、問題になったのではないかと伊高氏が指摘した。「フィデルは68年8月のソ連軍侵略時点で風刺画を許したが、ソ連軍の行為を苦渋しつつも是認し、69年の時点では既にソ連に異を唱えられる状況になかった。70年の砂糖大収獲計画（グラン・サフラ）の失敗を見越したコメコン加盟が前方にあったからだ」（伊高）。

さらに私も、ピエドラ教授が挙げた三つめの要因を補足したい。それは、日本共産党からの反感もしくは反発のようなものが黒木監督に対してあったのではないかと、という推測と、その根拠である。「日本のドキュメンタリー作家インタビュー」¹¹⁾のなかで、黒木監督は、自作『あるマラソンランナーの記録』の上映の際、党員ではないのに共産党から呼び出されて「反革命的な行為をしている」と文句を付けられたことがあり、そのとき「これは完全な作品侵害で言論の自由の弾圧だと反論した」エピソードを語っている。さらに、同インタビューで、『キューバの恋人』を自主上映する際、『若者たち』（1967年）がもつ全国ネットで上映しようとしたところ、共産党系の人々の反対が多くて、『マラソンランナー』事件もあるし、キューバは共産主義国家なのに、共産党を飛び越えて合作映画を作ったことに機嫌の悪さがあったのではないかと語っている。一方、黒木監督自身は、同志社大学の学生時代、党員ではないが共産党の会合に出ていて、奈良近辺の農村に「山村工作隊」として入っていた経歴がある¹²⁾。佐藤忠男によれば、「山村工作隊」とは、1950年代はじめ、日本共産党が一時的に極左冒険主義に走ったとき、暴力革命を主張して主として学生の活動家やシンパを動員し、山村での農民の革命蜂起工作をやらせたことを指す。黒木監督ら活動家は、派遣先で革命的な農民たちと合流するはずが、実際には全く受け入れられなかったそうだ。「革命近し」という幻想にふりまわされただけだった、と佐藤は指摘する。しかも1955年7月に党は、武力闘争は誤りだった、と方針転換をする。「党の指令に従ったあげく逮捕された活動家に対し責任をとった様子はなく、裏切られた思いをした

者も少なくない。」¹³⁾ ちなみに黒木は『キューバの恋人』の後に撮った『日本の悪霊』（1970年）でこの問題を戯画化している。「権力の命令に忠実で自分の判断を持たなかった」¹⁴⁾ ことを苦い思いと共に笑い飛ばしている作品だ。

もうひとつ、日本共産党との関連でいうと、1968年5月にキューバに渡航する際、黒木監督と一緒にいたA氏¹⁵⁾は、「黒木監督は共産党系の日本キューバ友好協会ではなく、山本満喜子さん主催の日本キューバ文化交流協会のルートでキューバに繋がったため、自分たちが正統なパイプだと自認していた共産党には冷たく扱われた」と証言している。『アキラの恋人』のなかで、津川雅彦氏は「(映画は)一般の映画館には配給されず、日本共産党が全国で上映会を開く形式で公開されました」と語っているが、両者の関係はむしろ良くなかったのではないか、そのことがもしかしたらキューバ側にも伝わっていたのではないかと私は推測する。

両作品の意義

真相はどうであれ、こうして見ると、『キューバの恋人』は、激動の60年代キューバを考察するうえで様々なヒントを提供してくれそうだ。今後さらに、その資料的価値に注目しつつ、“政治的時代”に生きた日本人とキューバ人の物語を通して、「キューバと日本」、「国家と個人」、「1960年代という時代」などについて考える材料にしたいと思う。

そして出来れば、キューバの人たちとも意見を交わしてみたい。この映画を観たキューバの30代の友人（1977年生まれ／映画監督）は、「アキラが一番人間らしい」と言った。そこで私が、彼の友人たちの意見も教えて欲しい、と頼んだところ、「一般に僕たちの年代なら誰もがアキラに共感する。なぜならマルシアの振る舞いは極端で、アキラ同様、困惑を覚えるからだ。僕たちの世代にとって、この映画は別の星の出来事に見える。今はもう存在せず、実際に神話としてのみ存在したキューバだ。」という返事を受け取った。

これまでの体験を通して、私は今こう見ている。『キューバの恋人』は、キューバ側証言者が言うように、「キューバに魅了された日本人監督の誠実な眼差しが捉えた」¹⁶⁾ キューバと革命のドキュメンタリーであり、その前で「立ちすくんでしまう」¹⁷⁾ 監督の姿がアキラに投影されている。

ピエドラ教授によれば、『アキラの恋人』というタイトルには、アキラに対するオマージュが込められている。それは、「キューバ側の関係者が皆、アキラを演じた津川雅彦に好感を抱いていた」からだ。また、黒木監督自身は対談のなかで「アキラは自分自身である」と言っている。監督は言う。「帝国主義や国家権力だけが『敵』じゃない」「大好きな女の子を獲得するのも男の闘争じゃないか、というレベルも非常に大事ではないか、という立場に僕は立っている」と。この発言は、キューバ革命と対峙するには“軽過ぎる”ように響くかもしれない。しかし、監督の真意は次の問いかけにある。「果たして政治主義的なことだけで人生を全うできるだろうか？」¹⁸⁾

黒木監督は、映画のなかで「キューバ革命」を軽々しく論じたりしない。自分に正直に、一切の先入観を排除し、理解したいという真摯な思いで向き合っている。その“誠実さ”は、映画を通してキューバの人に伝わったことを、私は『アキラの恋人』を通して知った。そして、『キューバの恋人』に対する観方が“更新”された。

私にとって『キューバの恋人』は、キューバ映画の傑作『低開発の記憶』と共通するものを持つ。それは、大義を前に「ためらい」を覚え、映画を通して「問いかけ」をしていることだ。日本の軍国主義と50年代の“革命幻想”を身を以て体験した黒木監督には、その反省から、「権力に服従して、自分の判断をもたない」人間に対する懐疑の念がある。

自分の判断をもつこと。それは、疑問をもつこと、問うことから始まる。私はそれをキューバ映画との対話を通して実感している。いつか『キューバの恋人』がキューバで公開されたら、そんなことをキューバの人と話し合いたい。その前段階として、まずは『アキラの恋人』によって『キューバの恋人』がキューバ映画史に足跡を残せたことを喜びたい。

〈註〉

- 1) マリオ・ピエドラ＝ロドリゲス：1947年、キューバのマタンサス出身。ハバナ大学で美術史の学士およびコミュニケーション学の修士を取得。ジャーナリスト出身だが、1974年から2003年までICAICに勤務。並行して1982年からハバナ大学文芸学部美術史学科にてキューバ映画史を教えている。2004年より同学部同学科の専任教授となる。また、国際シネクラブ副会長、*icaic digital*編集、国際新ラテンアメリカ映画祭顧問や内外の映画祭の審査員、国内外での講演・講義活動など、幅広く活躍。そうした業績に対し、内外で数々の賞を受賞している。なお、2012年11月にシンポジウム出席のため来日。都内の大学で行った講演『キューバ人のヒーロー「座頭市」』が「すばる1月号」に載録された。
- 2) 原題は*La novia (desconocida) de Cuba*。『キューバの恋人』の製作秘話に迫る調査レポートで、ドキュメンタリー『アキラの恋人』の製作資料兼レポートにもなっている。ICAICの機関誌*Cine Cubano*に掲載予定だが、現時点では未発表稿。
- 3) 阿部 p.49 および日本のドキュメンタリー作家インタビュー No.16「黒木和雄」(<http://www.yidff.jp/docbox/18/box18-1-1.html>)
- 4) 1950年代末にイギリス映画界に起こった一時的な運動。ドキュメンタリー映画製作における新たなアプローチとして始まった。「フリー」とは「個人的なもの（作品）」という意味であり、具体的には、商業的な圧力や過去のドキュメンタリー製作の慣例によって制限された映画より、むしろ現代の生活へのもっと個人的で、しばしば詩的な反応を後押しするような映画を支持した。[ブランドフォード p.317]
- 5) 註3参照
- 6) 『苺とチョコレート』映画プログラム（エキブ・ド・シネマ） p.14 および阿部 p.52
- 7) 阿部 p.52
- 8) ガルシア監督による本人へのインタビュー（『アキラの恋人』収録映像）
- 9) カロル p.449
- 10) 日本のドキュメンタリー作家インタビュー No.16「黒木和雄」
- 11) 同上
- 12) 東 p.8 および佐藤 p.114
- 13) 佐藤 p.107

- 14) 佐藤 p.111
- 15) A氏とは、まさしく6月9日の上映会で知り合い、その後個人的に1968年のキューバについて体験談を聴く機会を得たうえ、文書による覚書も頂戴した。女性史研究家のA氏は、山本満喜子氏が主宰する文化交流協会の紹介でキューバを訪れ、半年間の滞在中、スペイン語学習、国内見学、ボランティア活動など様々な交流プログラムを体験、「その間、何度か黒木監督とも顔を合わせた」そうだ。公開前の『低开発の記憶』をICAICの試写室で観たときも、黒木監督や小田実と一緒にだったという。
- 16) ガルシア監督による関係者へのインタビュー（『アキラの恋人』収録映像）
- 17) 『キューバの恋人』特典映像「監督、原一男氏と作品を語る」
- 18) 同上

〈参考文献〉

- ・ 阿部嘉昭・日向寺太郎編『映画作家 黒木和雄の全貌』フィルムアート社、1997年
- ・ カロル, K.S. 『カストロの道—ゲリラから権力へ』読売新聞社、1972年
- ・ 佐藤忠男『黒木和雄とその時代』現代書館、2006年
- ・ ピエドラ＝ロドリゲス、マリオ「キューバ人のヒーロー『座頭市』」『すばる』2013年1月号、pp.172-183
- ・ 東陽一編『黒木和雄年譜』映画同人社・黒木暢子、2006年
- ・ ブランドフォード、ステイーヴ他『フィルム・スタディーズ事典—映画・映像用語のすべて』フィルムアート社、2004年

〈映像資料（DVD）〉

- ・ 『キューバの恋人』黒木和雄監督
キューバ・日本 1969年 97分
(DVD発売元 株式会社カラーテック)
- ・ 『アキラの恋人』マリアン・ガルシア監督
キューバ・日本 2012年 56分
(DVD権利元 同監督)



(てらしま さちこ 本講座元受講生)